# 女の命令・男の命令
## —学園ＴＶドラマに見る教師のストラテジー—

小林美恵子

### １．はじめに—職場の命令

小林2003では、近代以後の日本語の命令形が男性専用とされた語形であることに基づいて、実際の命令・依頼がどのような語形でなされるのかを、ＴＶ刑事ドラマと実際の職場の談話について調べた。

刑事ドラマで用いられることばは、もちろんわれわれのイメージの中にある刑事らしさを表す仮想言語だが、ここでは男女ともに用いられる「～*て」「～てください」のような依頼表現とともに、男性による男性専用とされる語形を用いた「しろ」「行け」「～てくれ」のような表現、女性による「～なさい」「いらっしゃい」などの表現が見られ、あきらかにジェンダー・イメージの反映がある。特に「～しなさい」を頻発する女性上司への反発が描かれる場面もあり、社会にあいかわらず存在する「命令する女性」に対する反感や、その中で女性が命令する立場に立つことの難しさを感じさせる。

実際の職場の自然談話の資料（現代日本語研究会1997・2002）では、男女ともに「～てください」「～ていただけますか・いただければ（ありがたいです）」「お願いします・いたします」のような性差に偏らない丁寧な依頼形を多く用い、男性のほうがより丁寧な語形を使う傾向が見られた。高圧的に相手のフェイスを侵すことを避け丁寧な語形を用いることによる脱ジェンダー化が行われているわけである。ただし出現数は少ないものの、命令形が使われる場合、男性と女性の使用する表現形式は異なる。男性が親しい友人や年少者に対して用いている「○○しろ」のような命令形が女性によって使われた例はなく、いっぽうで女性にのみ「～な」「～なさい」が見られた。これらはおもに仕事上より、職場ではあっても雑談の場で出現するが、「～なさい」は、女性教師から学生・生徒に対してのみ用例が見られ、「仕事上命令をしなければならない」女性教師に特徴的な言い方の一つと考えられる。

（＊　「　」内の～は特に注記しない場合、動詞の連用形を指すものとする。以下同様）

## ２．学園ドラマの教師のことば

2005年４～９月期の連続ＴＶドラマに２つのユニークな学園ものが登場した。ＴＢＳの『ドラゴン桜』と日本テレビ系の『女王の教室』である。

かつての教師を主人公とする学園ドラマといえば年齢・性格はさまざまながら、熱血男性教師が生徒にあたかも友人のように接し、友情や人生への熱情を喚起するというようなパターンが多かったと思う。近年は女性を含む等身大の教師が主人公となるドラマが増えたが、いずれにせよ教師は心根のあたたかい導き手であり、反抗したり孤立する生徒もやがては教師とともに学校サークルの一員となっていくというのが大筋だろう。

今年登場した２本のドラマも最終回まで見てみると本質的には従来のものと変わるところはないのだが、『ドラゴン桜』は「東大合格」を唯一の目標として「偏差値35」の高校生を強引に引っ張る教師（実はつぶれかけた学校を建て直すために来た管財人の弁護士という設定である）を主人公とし、『女王の教室』にいたっては、「友情が何の役に立つ」「努力をしても幸せになれるのは６％だけ」「力を合わせるなどとは意味のないことだ」「成績によって序列をつけるのは当然」「成績不良の者は罰当番」など、言ってみれば現代の学校教育では否定されてきたことばかりを押し出して自己の教育方針を貫こうとする女性教師（黒ずくめの衣服とひっつめ髪で迫力十分）と、対する教え子の小学生の「抗争」を描いたという物語で、大いに茶の間の話題になったようである。

このような高圧的、強引で一見冷たい教師が主人公になるドラマが現れたのは、もはや学校が暖かい学びの場としての機能を期待されず、また学校自体も、特に公立学校などは教育行政に翻弄されてしっかりとした教育機能を失いつつあることへの警鐘であるように感じられるが、それはさておき、本稿では彼ら高圧的に「命令を下す」教師を含むＴＶドラマの学校教師がどのようなことばで「命令を下す」のかを確かめてみることにする。

そもそも学校教師の仕事は児童・生徒に何かをやらせる―それは学習指導・授業に関する指示であったり、生活指導面での禁止や当番活動などの指示、また部活動における指導であったりとさまざまな側面を持つが、いずれにせよ相手に断られることを念頭には置かない―いわば命令的な言語行動によって成り立っていることを否めない。しかもその相手は年齢差のある、社会的にも未完

成とされる児童・生徒であるのが普通だから、おのずと相手の意向を気にしない「生（ナマ）の命令形」さえ使うことは可能であるし、実際に学校現場で「〇〇しろ（よ）」「〇〇するな」「立て」「座れ」のような命令・禁止のことばが飛ぶのを耳にするのも珍しいことではない。

もちろん同じ学校教師とはいえ、年齢・性別も、対する児童・生徒や、彼らとの関係も、また教師自身の考え方もさまざまであり、地方による方言の影響差などもあろうから、すべての教師がこのような命令・禁止表現をするというわけではないだろう。しかし、すべての教師は児童・生徒に断ることを前提としない指示（命令）をしなくてはならないし、命令・禁止形式を使わないとすれば、そのためのストラテジーというものも当然持つはずである。これは女性教師においても例外ではないし、むしろ女性が命令・禁止形式を使うこと自体がない、という前提によって成立しているのが近代日本語だとするならば、女性には男性よりもさらに高度な命令のストラテジーが要求されると言えるだろう。

さて、それではＴＶドラマの教師たちはどのような言葉で児童・生徒に語りかけ、命令・指示や禁止をしているのだろうか。本稿で考察の対象としたのは、2003年から2005年までに放映された以下の６本のＴＶドラマの、おもに主人公である教師の児童・生徒に対することばである。括弧内には、主人公教師の年代・性別と担当する舞台となった学校や、担当する児童・生徒の学年などを記した。

『ドラゴン桜』（30代男性教師・弁護士　高校男女６人の特進クラス）
『ヤンキー母校に帰る』（20代男性教師・共学高校）
『女王の教室』（30代女性教師・小学校６年生）
『みんな昔はこどもだった』（20代女性教師・山村分校小学生６人）
『ごくせん』（20代女性教師・男子高校）
『３年Ｂ組　金八先生』（50代男性教師・中学３年生）

以上のドラマの教師のことばについて①教師の自称②生徒に対する呼びかけ方③文末表現を中心とする待遇度④命令・依頼の表現⑤その他の言語的特徴に

ついて検討する。

ところで、もちろんＴＶドラマのことばは架空に作られたものであり、現実そのものではない。果たして現実の教師たちのことばをどれほど反映しているのかという疑問は当然あるだろう。しかし、特に児童・生徒に対して話しかけるとき、現実の教師は単に「自然談話」をするのではなく、教育効果をあげるため通常の会話よりもさらに意図的に自らの話し方やことばを「作る」ものである。それは権威の強調である場合もあり、親しみを表出する場合もあり、さまざまな方策があり得るが、いずれの場合でも教師の対生徒談話は感情や意識を自ずと反映したというものではありえないし、またどのような親しみや対等感の表出をしようとも、そのなかで相手が断ることを想定しない命令・指示・禁止をしなくてはならないことも事実なのである。したがってこのような談話はある程度ステレオタイプなものにならざるを得ないし、ステレオタイプでありながら、教師自身の年齢・性別・考え方や生徒との関係、話の場などによって多様な様相を示すものでもあると考える。つまり教室での授業の話し方、放課後の個別指導での話し方、あるいは生徒との「雑談」の話し方などがそれぞれ違ったものとしてあるということである。そしてこれらの話し方は、話者である教師自身の個性を反映する側面とともに、個性を超えたジェンダー・ステレオタイプとか、いわゆる教師的な話し方というようなステレオタイプをも内包するのだと考えられる。これらのＴＶドラマの脚本家が作った教師の会話にもこのようなステレオタイプを見ることは可能だろうと思われる。

なお、以上の点から問題となるのはあくまでも会話のステレオタイプであり、個々の形式の発話の頻度などは問題にはしにくい。展開のそれぞれ違う複数のドラマの中で誰がどのような発話を何回したかというような比較もあまり意味がないと考える。そこで、以下に６つのドラマの、それぞれ一般的な談話例をあげて特徴を見ていくこととする。

### ２．１　男性教師のことば

（例１－１『ドラゴン桜』男女複数生徒を相手に。Ｔは教師、Ｆは女子生徒Ｍは男子生徒。↑は疑問形などの文末の上昇イントネーションを示す。なお①～⑤に該当する特徴的な用例に下線と番号を付けた。以下の用例についても同

様である）

T　②矢島よ、②おめえ、最近なんか忘れてるようだけどよ、①おれに借りがあったんじゃなかったっけか。　それに②おまえ、家の借金③どうするんだ↑

②水野よ、おまえ、やっすいパブのやっすいホステスなんのか、龍山（りゅうざん）出てすぐよ。あーらいらっしゃいってカラオケスナックの③ママか。

F　やめてよ。

T　緒方。

M　おう。

T　もう犯人扱いはうんざりだろ、③こりごりだろ。

奥野よ、おめえ秀明館（しゅうめいかん）の弟を③⑤見返してえんだよな。

小林よ、おまえのルックスじゃあタレントなんて東大ブランドなしじゃあ夢のまた③⑤夢じゃねえのか。

小坂、おまえなんだっけ。

F　えー。

M　わかったよ。全力でやりゃあいいんだろ。

T　⑤わかりゃあ③いいんだ。

M　あんた、ほんと、うめえな。

F　まじ、むかつくわ。

T　なら、そのむかつきをよ、②おまえら勉強に④ぶつけろよ。

（例１－２『ドラゴン桜』　男子生徒への個人面談）

T　②おまえをなぐったのは③誰だ。

M　ぼくはだれにも殴られていません。ぼくが不注意で転んで。

T　は↑転んだ↑③転んだのか。

M　はい

T　でもよ、その痣、どう見ても転んでできたようにゃ③⑤見えねえよ。

②おまえ、③⑤うそいってんな。

M　いえ。

T　ほんとのこと、④話せよ。

①「おれ」②「矢島」「水野」など名字の呼び捨て。「おめえ」「おまえ」「おまえら」（但し「おめえ」は男子に向かってのみ用いられている）③「○○んだ」「○○か↑」「○○だろ」「○○だよな」④「話せよ」「ぶつけろよ」⑤「見えねえ」「見返してえ」「夢じゃねえ」「わかりゃあいいんだ」などの音の変化が見られ、男性が対等以下の親しい男性に用いるとされる典型的な語調が見られる。１－１の生徒は「やめてよ」（女子）、「あんた、ほんと、ロうめえな」（男子）のように対等な口をきき、いっぽう１－２の生徒は「～ません」「はい」「いえ」など、比較的丁寧な言い方をしているが、教師の側はこれに対して特に待遇度を変えたりはしない。

（例２－１『ヤンキー母校に帰る』教室ＨＲで。　Ｓは複数生徒の同時発話。ｆは前の発話者Ｆとは別の女性話者であることを示す）

T　おい②てめえら、ゆっとくけどな、走るからに②はおめえ、ぜってえ④優勝しろよ、⑤こりゃー。

F　てめえにはっぱかけられる筋合いじゃねえよ。

f　だいたい、マラソンなんかで優勝してなんのとくがあるっつうんだよ。

T　達成感とか満足感とかいくらでも③⑤あるじゃねえか。

（中略：生徒からマラソン大会に優勝したら焼き肉をおごれとの提案がある）

F　いいんだな吉森。

T　だから③優勝したらな。

S　札幌、焼肉、札幌、焼肉・・・（連呼）

T　おい、②おめえら、そのかわりな、おめえらが優勝できなかったら①おれに焼肉④おごれよ。３年Ｃ組35人、全員で毎日交代でおれに焼肉④おごれ。

S　（騒然）

T　⑤バーカ、一方的に条件出してかけが成立するほどな、世の中③⑤甘く

ねえんだよ。

①「おれ」②「てめえら」「おめえ」③「○○だろ」「○○じゃねえか」「○○だよ」④「優勝しろよ」「焼き肉おごれよ」「焼き肉おごれ」⑤「○○すりゃ」「ぜってえ」「○○じゃねえか」「甘くねえんだよ」、「こりゃー」「バーカ」など、一見相手に対する配慮のない、断定的かつ乱暴なもの言いだが、生徒との対等な物言いを意図したとも言える。生徒から教師に対しても女子生徒も含め「吉森」「てめえ」「はっぱかけられる筋合いじゃねえ」など暴言に近いとも言える発話が見られる。

（例２－２『ヤンキー母校に帰る』女子生徒への個人面談）

T　今までの②おまえは⑤岩崎*にＣ組っていう居場所を与えて③もらっていた。でもさ、これからは②クミコが自分で居場所をさがさなきゃ、作っていかなきゃ。
大丈夫だから、おまえだったら③できるよ。
一緒に走ろう。あしたみんなと④一緒に走ろうよ。①おれも走るから。
今までみたいにあいつらのけつをくっついて③歩くんじゃない。
あしたはさ、おまえがあいつらを④ひっぱってってやれよ。
それがクミコにできることだろ。あいつらにして③あげられることだろ。
④勇気出せよ、②作田クミコ。

F　みんなと、みんなと一緒に走りたいです。

T　③よし。

（＊ 岩崎＝生徒の元担任教師の名。同僚教師を生徒に向かって呼び捨てにしている）

走るのは速いが、気が弱く引きこもり状態になってしまった女子生徒にマラソン大会への参加を誘う談話。①「おれ」②「クミコ」「おまえ」④「ひっぱってってやれよ」「勇気出せよ」などについては２－１とかわらないが⑤２－１で頻発された「おめえ」「○○ねえ」などのべらんめー口調や、縮約形、合いの手などは影をひそめ落ち着いた物言いになっている。また、命令形以外に「一緒に走ろう（よ）」と勧誘の形で相手の行動を促している。

『ヤンキー』*では相手や状況によるコードスイッチングが行われていることになる。また『ドラゴン桜』も含め、以上の男性教師の談話では生徒への行動の指示は動詞・命令形＋終助詞「よ」の形で直接的に行われる場合が最も多い。

（＊ ドラマ名については以下適宜略号を用いる。）

## 2．2　女性教師のことば

（例３－１『女王の教室』教室ＨＲ）

T　①わたしの教室では夏休みはありません。今までどおり毎日学校に④来てもらいます。スケジュール表を③渡しますので、各班の班長、班の人に④配って。

S　はい。

T　夏休みの間毎日出席するたびにそのカードにこのシールを③貼ります。テストの成績がよかったり、運動や音楽が優秀だったり、挨拶がきちんとできる人にもシールを③貼りますから全員首からぶら下げて常に④⑤携帯するように。

そうやって各自のポイントを集計したものを、こうしてグラフにして③張り出します。もちろん一番得点の低い人と、低い班には居残りと罰を③⑤与えます。

⑤そうねえ、みんなが帰るまで机の上に正座して反省するのは③⑤どう↑

もちろん、今まで以上に雑用も増やして⑤ね。

（例３－２『女王の教室』教室ＨＲ）

T　今日も最下位はいつものふたりみたいね。みんなが帰るまで④反省してなさい。一番成績が悪い班も六班（ろっぱん）だから馬場さんと進藤さんはこのふたりと一緒に残って掃除を④しておきなさい。

F　先生。

T　なんですか、馬場さん。

F　班をかえてください。ふたりのせいでわたしがいくらがんばっても毎日雑用やらされるし。

T　進藤さんならともかく、あなたがそんな偉そうなことをいえるような成績をとってる⑤かしら。カードを④持ってきなさい。くだらない質問をしてみんなの貴重な時間を無駄にしたから③マイナスポイントです。

F　そんなー。

T　④早くしなさい。

①わたし②「馬場さん」「あなた」③「～ます」「～ません」「○○です（か）」「○○ね」「○○かしら」「どう↑」④「～てもらいます」「～て」「○○するように」「～なさい」「～てなさい」と、「です・ます」調を基調に、いわゆる女性特有の表現といわれる「○○みたいね」「そうねえ」「～てね」のような「ね」、「かしら」などの終助詞がよく用いられ、全体として比較的丁寧な「女性的」な発話である。一方で命令・指示の語は多く、最も多い「～（て）なさい」のほかに、これだけの引用でも３種類の形式が見られる。「命令形＋よ」中心に使っている男性の命令形よりはあきらかにバリエーションに富む。ただし、男性と同じような「命令形（＋よ）」の形式はもちろん１例も見られず、あくまでも「女性らしい」丁寧な形式を取る。⑤「携帯する」「罰を与える」のような文章語的な言い方も相俟って、この丁寧な女性形は優しさや和らげの効果よりは冷たい優越を感じさせる高圧的な言い方としてドラマのなかで設定され、俳優もそのように演じている。対する子どもたちも『ドラゴン桜』『ヤンキー』のようなくだけた言い方はまったくなく、「です・ます」「ください」などを用いる。

（例４－１『みんな昔は子供だった』教室ＨＲ）

T　これに自分の名前を④書いてください。②ふうた君はふうた、②ももちゃんはもも、しんくんはしん、たっぺい君はたっぺい、しおんちゃんはしおん、わたる君はわたる。

M　畠山とかじゃなくて、上の名前じゃなくていいの↑

T　下の名前で③いいんです。①先生はわたる君のことはわたる君と呼びますから。

(例４－２『みんな昔は子供だった』教室授業)

S　それ、なに↑

T　この村の③地図です。これからこの真っ白な紙にみんなで地図を③作っていきます。世界でたった一枚の②みんなだけの地図です。
来週みんなのおとうさんやおかあさんが授業を見に③いらっしゃいます。

S　えーっ、ほんと↑

T　③ほんとです。一ヶ月半、この村でみんながどんな生活を送っているのか、この地図を使ってお父さんやお母さんに④教えてあげましょう。

S　はーい。

(例４－３『みんな昔は子供だった』夜、寮で泣いている児童と周りの子供たちに)

T　④がまんしなくていいよ。こどもはがまんしなくて③いいんだよ。いっぱい泣いて、泣いて④元気になろうね。
そうだ、たっぺい君、あそこに③行きましょう。

M　あそこ↑

S　ねえ、どこ行くの↑

T　いいとこ。
はーい、それでは②みなさん③出発します。

全体に大変丁寧で、優しい口調で語られる。①「先生」②「みんな」「みなさん」「名前くん」「名前ちゃん」など。③文末も「です」「ます」「～ましょう」が基調だが泣いている子供を励ますシーンでは常体を使っている。④「～てください」「～ましょう」「○○なろうね」「～なくていいよ」と、勧誘や許容の形での指示が目立ち、命令形や「～なさい」も現れない。ここでは「ね」「かしら」など、『女王』に見られた「女性的」表現はまったく見られず、丁寧ではあってもジェンダーには偏らない表現が用いられている。対する児童のほうは『女王』とは違い常体で、むしろくだけた「子供らしい」語調。したがって、教師のこの丁寧さも『女王』とは違い、堅苦しさや冷たさでなく親しみ

や相手に対する尊重を感じさせるものとして用いられていると言えよう。「みんな」という呼びかけや勧誘表現の多用もそのイメージを助けている。

（例５－１『ごくせん』授業）

T　だれかこの問題分かる人。だれも③わかんないの↑ね、②みんな③聞いてる↑③聞いてますか↑聞こえますかー↑③聞いてんのか、③⑤つってんだろが。
人が話をしてるときは相手の顔を③見る。②おまえらそんな常識も③知らないのか。
②熊井君前に出てこの問題④解いてみて。

M　だったら頭さげろや。

T　は↑

M　人にもの頼むときゃ頭さげろよ。そんな常識も知らねえの↑

T　頼んでんじゃなくて、命令してるんだけど。

「聞いてる↑」「聞いてますか↑」「聞こえますかー↑」「聞いてんのか、ってんだろが」という変化、「この問題解いてみて」という指示は「頼んでいる」のではなく「命令している」のだ、という発言は、まさに教師の心的状況を反映したことばのように思われる。

（例５－２『ごくせん』授業）

T　ほら、④静かにして。授業③始めます。
②沢田、遅刻すんないっていった③でしょう。
授業③始めます。

（例５－３『ごくせん』教室ＨＲ）

T　ちょ、ちょっと、②おまえたち、球技大会にむけて今日から③特訓だ。

M　なんだよ、特訓って。おれたち、そんな暇ねえんだよ。

T　もちろん、ただで、とは③いわないよ。

M　なんかくれんのか↑

T　あー、優勝したらホッペに③チューしてやる。

M　だれが。

T　①あたしが、に③⑤決まってんだろ。（生徒騒然と身を引く）
ちょ、ちょっと②おまえら。ああそうか、ホッペじゃ③不満なのか。

M　それ罰ゲームだな。

（例５－４『ごくせん』生徒個人と話す）

T　③なにしてんだよ。ひとりじゃ③⑤起き上がれねえのかよ。だれかが手を貸してくれるのな、④⑤待ってんじゃねえよ。そんなんじゃな、いつまでたってもおまえは弱虫のまんまなんだよ。義理人情も渡世の仁義もてめえの足でしっかり歩いてる胸張って生きてるやつにしか通用③⑤しねえんだよ。逃げてばっかのやつにな、手え貸してくれるほど世の中そんなに甘くねえんだよ。

（中略）

M　うわー、あっ。（飛びかかりＴを倒す）

T　③⑤やるじゃねえかよ。④忘れんなよ。今みたいに自分で起き上がって立ち向かっていけばいいんだよ。あしたの球技大会④来いよ。絶対④来いよ。
③待ってるからな。

題材自体は任侠一家の孫娘がそのことを隠して教員になり、学校一評判の悪い猛者揃いの男子クラスを担任するといういささか非現実なものだが、ここに見られる緩急自在なことばの使い分け、①「あたし」（「わたし」の例もある）②「みんな」「名字くん」「名字（呼び捨て）」（愛称で呼びかけた例もある「クマ」）「おまえたち」「おまえら」③「です」「ます」「だ（よ）」「だろ」「〇〇なのか」「〇〇じゃないのか」「〇〇じゃん」④「～て」「来いよ」「待ってんじゃねえよ」は相手や状況によってことばを使い分け、語調を変えていくという教師の実態に案外近いかもしれない。「です・ます」で一応のけじめをつけて授業を進行しようとしたり、生徒と同じレベルのことば遣いに下りていって生徒への提案・提起を受け入れられるものとしたり、また登校して

こない生徒を呼びだして球技大会への参加を促す言説では『ヤンキー』にも見られたような「男っぽい」発話が見られる。５－４では『ドラゴン』『ヤンキー』にも見られた⑤「ない」の変化した「○○じゃねえかよ」「○○ねえ」などもある。おとなしい女性教師が、いざ事あらばやくざ調の荒っぽいことばで生徒を心服させるという設定だが、女性が有無を言わせぬ命令で相手を従わせようとするとき、「男ことば」になるということ自体が女性にとっての命令の難しさを示しているとも言える。

### ２．３　ベテラン教師のことば

（例６－１『金八先生』教室ＨＲ　ｍ、ｍ´は前の発話と別の男性話者であることを示す）

Ｍ　先生。

Ｔ　はい、②シマケン。

Ｍ　あの、ぼくも昔どうしても学校に行きにくいときがあって、そのときは毎朝友達が迎えにきてくれたので不登校にならずにすんだんですけど、そういうのどうかな。

ｍ　やめよ。しょうがないじゃん、自分がその気になんなきゃね、あいつはこねえのよ。

Ｔ　②車掌、メガホン使ってひそひそ④話すんな。気になる③だろ↑。

Ｍ　でもきっかけは必要だよ。

ｍ　じゃあさ、レイコが迎えに行ってやれよ。

ｍ´　そうそ、ほれてんだもんなあ。くのいち、恋の八方手裏剣シュシュシュ。

Ｔ　⑤はいはいはいはい。はい、④静かにしなさい。
だれかが、だれかをすきになるってのは当然の③感情ですよ。だれかひとりを好きにならないかぎりみんなを好きになることはできない③わけでしょ、ね。だれかが、だれかを好きだ、そのことをね、横からからかうってのは人間として③最低ですよ。

Ｍ　そうだ、からかうなんて最低だぞ。

Ｔ　はい、③⑤えらい。④座れ。

（例６－２『金八先生』授業）

T　③⑤はーい、④静かに。はい、授業に③はいりましょう。
今日から古文ですね。万葉集の中からひとつ歌を取り上げて、②皆さんに紹介したいと③思います。はい、紹介する歌、この③歌です。
今日は①先生が読んで③みましょう。⑤はい、③行きますよ、⑤はい。
君待つとわが恋おればわが宿のすだれ動かし秋の風吹く。恋うたです。
ラブソングですね。読んでるだけで、こう、せつなさに胸がどきどきして③きますねえ。

M　どれどれ。

m　なにすんだよ。

M　だからどきどきしてるかどうか。

m　してねえよ、ちんぷんかんぷんだもん。

T　うわー、③もったいないなあ、こんなすばらしいラブソングを前にしてどきどきしないなんて。はい、この歌を作った人はといいますと、③この人です。
大変、美人だったという伝説が③残っています。

M　ねえねえ、どんなタイプ↑

T　いいから勉強の時間、勉強の時間、④すわんなさい。

（例６－３『金八先生』女子生徒個人と話す）

F　ちょっとお話したいことがあります。

T　ん、こっちへ④おいで。（場面転換）シュウの住所↑

F　はい、お見舞いに行ってあげたいんです。でも、シュウ今のうちに来られるのが嫌みたいで教えてくれなかったから。

T　③そうなんだよな。①わたしが行ったときもシュウひどく家（いえ）に来られるのいやがってた③もんな。なあ、②マイコはシュウの幼なじみ③でしょう、なんかこう、シュウのおうちのことで知ってることあったら、①先生に④教えてくれないかなあ。

『金八先生』は1979年の第１シリーズから25年以上にわたって数年ごとに作

られ、すでに7シリーズ目に入っている。最初独身の青年教師だった「金八」も50代のベテラン教師となった。①「先生」「わたし」②愛称（「シマケン」「車掌」）「名前（呼び捨て）」「皆さん」③文末は授業では「です（よ）」「ます（よ）（ね）」「でしょ」「ましょう」などに「○○（だ）なあ」「○○だろ」「○○なあ」などが混じり、生徒と個人的に話す場では常体をつかっている。命令・指示・禁止も④「○○すんな」「すわんなさい」「○○しなさい」「座れ」「おいで」「～てくれないかな」など多様で、相手の生徒や状況によって使い分けている。また⑤「うわー、もったいないなあ」「えらい」文頭・文末の「はい」などの間投詞的な発話が多いのも特徴的である。生徒の感情に合わせたり、自分の感情に引き込むためにさまざまな手段を使っているわけである。これらの中には若い男性教師が用いるような「男っぽい」命令形や文末の言い切りもあるが、その割合は高くなく、語調もべらんめ一調などの威勢のよさはない。なお、79年の第1シリーズを確認してみると、当時も「金八」のことばは『ドラゴン』『ヤンキー』のようなものではなかったが、しかし、いわゆる「男ことば」でのしゃべりは現在よりは多く感じられる。これについては稿を改めて確認したい。

### 3．まとめ―教師のジェンダーによる命令のストラテジー

以上6つのＴＶドラマの教師のことばについては若い男性教師ほど、対等以下の男性どうしに用いるとされるような「男っぽい」口調で話し、命令も「命令形＋よ」が中心であまりバリエーションはないこと、女性教師の場合は男性よりも文末や命令のバリエーションが豊富だが、その多くはジェンダー的な偏りのない中性表現で「です・ます」を中心とするものから、むしろ男性的とされる表現「名前・名字の呼び捨て」や、「命令形＋よ」などさえ用いられていることがわかる。命令に関しては女性の場合勧誘の形で行われることも多い。いわゆる女性的とされる文末表現や「～なさい」も使われているが、少なくとも今回の調査では、冷たく生徒との距離を取る歓迎されないことば遣いとしての位置づけである。『女王』以外に、生徒も含めＴＶドラマの学校でいわゆる女性的な文末表現が使われることはほとんどなかった。すなわち、ここに見られるのは女性教師のいわゆる「女性らしい」表現形式が『女王』のように児童・

生徒にも歓迎されず、教師自身にも選び取られてはいないこと、同時に女性教師の「男性的な」命令形も受け入れられてはいないという女性教師に対する二重の縛りである。

30年ほども前のことだが教育実習の指導教官に「あなたは教師なのだから、『朗読をして下さい』と頼むのでなく、命令しなくてはならない」と指導を受けたことがある。その後高校で教師を続けてきて、昨年現任校に異動した。この年の生徒による授業評価で私に対して最も多く言われたのは「ことばが乱暴である」というものであった。このような評価をそれ以前にされたことはなかったし、授業は「です・ます」体を基調として行っているので、多分この評価は、頻発せざるをえなかった「携帯をしまいなさい」「化粧をやめなさい」「教科書を開きなさい」そして度重なると「しまえ」「するな」「開け」となった命令形に対して行われたものと考えている。男性の同僚にこのような評価がされたことはほとんどなかったが、これは彼らが注意や禁止をしなかったから、とは考えられない。今回の高校のＴＶドラマでの生徒のことばは「おとな」には想像もつかないような「タメロ」だが、これも学校によっては現実からそうかけ離れたものではないと知った。

以上のような現実が女性教師の命令・指示を難しくしていることは確かであろうし、その結果がＴＶドラマにも反映して、ストラテジーとしての女性教師のことばの多様化や、中性化、また「男性化」を生み出しているのであろう。そのようなストラテジーは女性に顕著だが、男性のベテラン教師にも見られるものであることもＴＶドラマは示している。ストラテジーとして多様な表現形式を持つと言うことを「ことばの豊かさ」としてとらえる視点（高橋1999など）もあり、実際に女性教師やベテラン教師はこの点で、教育技術に長けているとは言えるかもしれない。しかし、特に女性の場合、この「豊かさ」が、女性が命令形を使ったり女性に命令されること自体への児童・生徒の偏狭で保守的な拒否感から生まれているとするならば、このような状況に甘んじて「豊かさ」などと喜んでばかりはいられないのである。

**参考・引用資料**

小林美恵子2004「職場における命令・依頼表現－ジェンダー的視点から見る－」（『ことば』

24号現代日本語研究会)
現代日本語研究会1997『女性のことば・職場編』ひつじ書房
現代日本語研究会2002『男性のことば・職場編』ひつじ書房
高橋良子1999「武器としての敬語」（『月刊言語』大修館書店vol.28・NO11）
『ドラゴン桜』2005　ＴＢＳ
『ヤンキー母校に帰る』2003　ＴＢＳ
『女王の教室』2005　日本テレビ
『みんな昔はこどもだった』2005　関西テレビ
『ごくせん』2003（シリーズ化されたが第１作を使用）日本テレビ
『３年Ｂ組　金八先生』（第７シリーズ）2004　ＴＢＳ
『３年Ｂ組　金八先生』（第１シリーズ）1979　ＴＢＳ

（こばやし　みえこ）